

I-245 Müller-Breslauの原理の動的問題への適用

熊本大学 正員 平井一男
○水田洋司

はじめに。

前報では、支点を不動点から可動点へ変更した場合の問題を、Müller-Breslau の原理を用いて処理する方法を、静的問題・動的問題について述べた。ここでは、構造物が基礎に強制変位を受ける場合にも、Müller-Breslau の原理を用いて解けることを示す。

理論。

Müller-Breslau の原理によれば、図-1の単純梁において、支点 α が変位 δ_α した時の任意の点 (x_i) のたわみは、任意点 (x_i) に P なる荷重を作用させた時の支点 α の反力に等しい。従って、支点反力の影響線が求まつていれば、基礎が強制変位した時の応答を簡単に求めることができる。

1. 静的問題

図-1の系の支点 α の反力の影響線は、有限要素法によれば

$$F_{\alpha i} = -f K_{2i}^T \quad (1)$$

ここに、

$$\begin{bmatrix} F \\ F_\alpha \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} K_{11} & K_{12} \\ K_{21} & K_{22} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} W \\ W_\alpha \end{bmatrix} \quad \cdots \text{支点 } \alpha \text{ を含んだ形}, f = K_{11}^{-1}$$

任意点 (x_i) に外力 P が作用した時の支点反力は、(1)式を用いて

$$F_\alpha = F_{\alpha i}^T \cdot F = -K_{2i} f \cdot F \quad (2)$$

ここに、
 $F = [0, P, 0]$, i 要素のみに P なる値をもち他の要素は零

また支点 α が δ_α だけ沈下した時の x_i 点の変位 δ_i は、 x_i 点に δ_α の荷重を作用させた時の支点反力に等しい。式で表わせば、

$$\delta_i = -K_{2i} f \cdot F \quad (3)$$

ここに、
 $F = [0, \delta_\alpha, 0]$, i 要素のみに δ_α なる値をもち他の要素は零
それ故、基礎変形による基礎以外の変形 δ_i は、

$$W_i = -K_{2i} f \cdot \delta_\alpha \quad (4)$$

2. 動的問題

基礎に動的強制変形を受けた場合にも、静的問題の場合と同様に考えて、問題を処理できる。(4)式の f の代わりに、動的柔軟マトリックス f_d を用いて、基礎変形による動的応答は、次式の様に書ける。

$$W_i = -K_{2i} f_d \cdot \delta_\alpha \quad (5)$$

一般に、(5)式の K_{2i} は零要素を多く含むため、その全要素を使用する必要はない。零要素を取り除き縮合された K_{2i} を \bar{K}_{2i} と表わすと、それに対応して f_d も \bar{f}_d と表わせる。例えば、 $\delta_\alpha = X \sin \omega t$ なる基礎変形を受けた時の定常状態での \bar{K}_{2i} の (i, i) 要素は次式で表わされる。

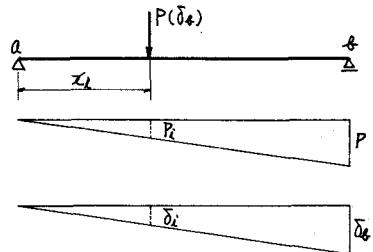
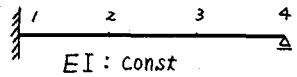


図-1 支点 α の反力の影響線

$$\bar{f}_d(i,j) = \sum_{n=1}^N \frac{1}{\omega_n^2 - \omega^2} \Phi_n(x_i) \cdot \Phi_n(x_j) \quad (6)$$

ここで、 N : 全自由度数、 ω_n : n 次の固有振動数、 $\Phi_n(x)$: n 次の固有モード
計算例。



1. 静的問題

図-2に示す梁の支点4が $\delta = 1$ だけ強制変位した時の変形を求める。

$$K_{11} = \frac{EI}{L^3} \begin{bmatrix} 24 & 0 & -12 & -6 & 0 \\ 0 & 8 & 6 & 2 & 0 \\ -12 & 6 & 24 & 0 & -6 \\ -6 & 2 & 0 & 8 & 2 \\ 0 & 0 & -6 & 2 & 4 \end{bmatrix} \quad K_{21} = \frac{EI}{L^3} [-12 \ 6 \ 6]$$

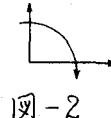


図-2

(1)式より支点4の反力の影響線は。

$$\bar{f}_{4I} = [0.14181, -0.27777, 0.51852, -0.44444, -0.50000]$$

(4)式より基礎変形による変形は。

$$\bar{w}^T = [-0.14181, 0.27777, -0.51852, 0.44444, 0.50000] \quad (a)$$

一般的手法によろ解。

$$\bar{w}' = -\bar{f}_{4I} \delta \text{ より} \quad \bar{w}'^T = [-0.14181, 0.27777, -0.51852, 0.44444, 0.50000] \quad (b)$$

2. 動的問題

図-3に示す簡単な2質点-バネ系を例にとり、一般的手法との比較を行なう。
図-3において、 $k_1 = k_2 = k$, $m_1 = m_2 = m$, $x_s = \sin \omega t$ とする。

$$K_{11} = \begin{bmatrix} 2k & -k \\ -k & k \end{bmatrix} \quad \bar{K}_{21} = [-k]$$

$$(5) \text{式より} \quad \bar{w}_d = -[-k] \begin{bmatrix} \bar{f}_{11} \\ \bar{f}_{21} \end{bmatrix} \cdot x_s \\ = k \sum_{n=1}^{\infty} \frac{\Phi_n(1)}{\omega_n^2 - \omega^2} \begin{bmatrix} \Phi_n(1) \\ \Phi_n(2) \end{bmatrix} \cdot \sin \omega t \quad (c)$$

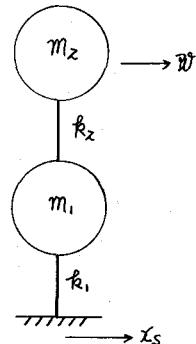


図-3. 2質点-バネ系

一般的手法によろ解

$$M\ddot{w} + K(w - \bar{w}_s) = 0, \text{ 変形して } M\ddot{w} + K\dot{w} - K\bar{w}_s = 0, \text{ ここで } \bar{w}_s = \bar{x}_s \{1\}$$

上式をモーダル・アナリシスにより解く。質点Yの応答は。

$$w_Y = \sum_{n=1}^{\infty} \left\{ \frac{1}{\omega_n^2 - \omega^2} \Phi_n(Y) \cdot \sum_{i=1}^N \left(\sum_{j=1}^N \Phi_n(i) \cdot K_{ij} \right) \right\} \sin \omega t$$

$$\text{従って} \quad \bar{w}_1 = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{\omega_n^2 - \omega^2} \Phi_n(1) \{ \Phi_n(1)(2k - k) + \Phi_n(2)(-k + k) \} \sin \omega t = k \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{\omega_n^2 - \omega^2} \Phi_n(1) \cdot \Phi_n(1) \sin \omega t \\ \bar{w}_2 = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{\omega_n^2 - \omega^2} \Phi_n(2) \{ \Phi_n(1)(2k - k) + \Phi_n(2)(-k + k) \} \sin \omega t = k \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{\omega_n^2 - \omega^2} \Phi_n(1) \cdot \Phi_n(2) \sin \omega t$$

$$\text{故} K, \quad \bar{w}_d = k \sum_{n=1}^{\infty} \frac{\Phi_n(1)}{\omega_n^2 - \omega^2} \begin{bmatrix} \Phi_n(1) \\ \Phi_n(2) \end{bmatrix} \cdot \sin \omega t \quad (d)$$

本法と一般手法によろ解は、(a)と(b), (c)と(d)と見よ様に一致する。

[参考文献]

1. 平井水田、「Müller-Breslauの原理による境界条件の変更」 西部支部講演会 S50.2

2. 平井水田、「境界条件の変更(不動点より可動点)に関する解析手法」 第29回年次学術講演会 S49.10